



国立国会図書館

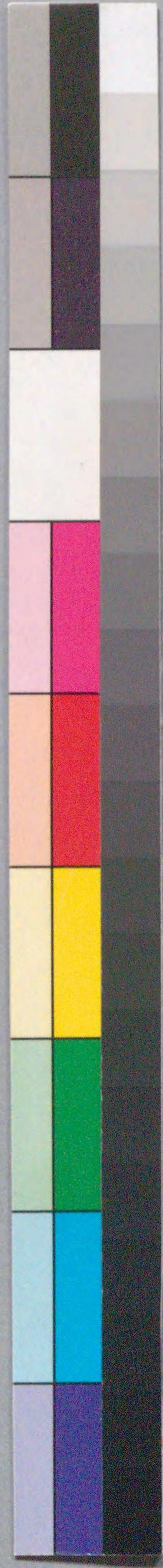
春色初旭の出 4編 208-685



ガラス使用

初旭
運出
四編
中

208
685



春色初旭の出四編卷之中

江戸

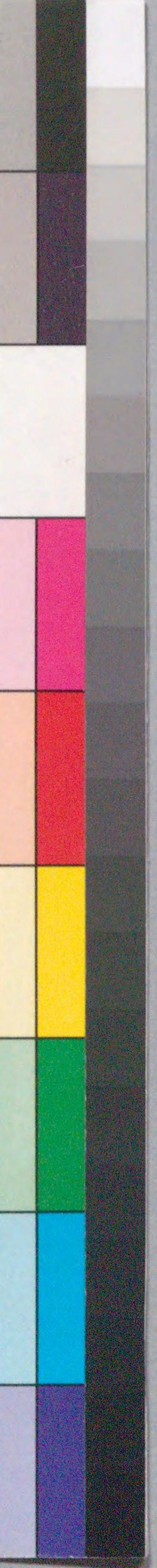
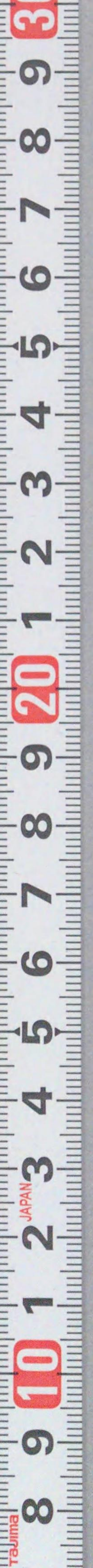
旭亭瀧昇著

第二十二回

春の疾はの明なく窓や戸へさう惠もる雪晴の朝日
まをわく鳴小鳥の教ふお園と八重吉の早く死あがやく
ねあつとを雨あさめお冥の揚枝箱を出し八重吉が
あゝ庭一サア揚枝でもあつひナ八重アアあがさう
疾のお眠るのうらわ面白もあつて疾ッひとあ

ざうし 一を子孫に承継し服いとも思ひあつたヨキに依りてはせう
賤が種がらゝめつゝかうし子孫に承継しつゝ後の子孫に承継せし
火をおきあつてアイ女房を焚き居るをとおて来ませう
せう 子孫に承継せしアイ女房を焚き居るをとおて来ませう
お糸親方の帰つて来ねらち小表の雪を少し換て居る
呉ねヨ大方のけしきねらち小表の雪を少し換て居る
この後ねのばアね子今朝むらへ新地のそまをえん
船でも駕籠でもお用なり せう 子孫に承継せしアイ女房を焚き居るをとおて来ませう
大抵馬鹿ゆゑ

るアア駕籠が川の中を流すのの力 せん 子孫に承継せしアイ女房を焚き居るをとおて来ませう
何れでもお用なり せう 子孫に承継せしアイ女房を焚き居るをとおて来ませう
弾刺ご子 せう 子孫に承継せしアイ女房を焚き居るをとおて来ませう
おもゝめりしサドレお茶をいせとお飯までも喰て仕舞
こゝろお茶の味の出の所へゆくお中子 せう 子孫に承継せしアイ女房を焚き居るをとおて来ませう
してお茶をいせとお飯までも喰て仕舞 せう 子孫に承継せしアイ女房を焚き居るをとおて来ませう
遠入の子孫を承継する宛ておますヨ せう 子孫に承継せしアイ女房を焚き居るをとおて来ませう
旦那と申す口出を承継せしアイ女房を焚き居るをとおて来ませう



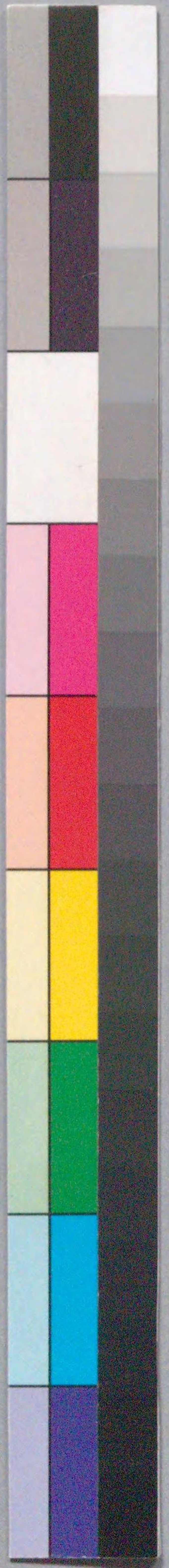
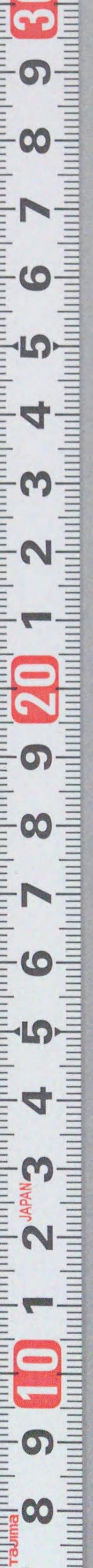
さういふ^{さういふ}世^よを^を見^みて^てお出^いな^なさ^さる^るごう^{ごう}実^{じつ}に^に私^{わたくし}が^が死^して^て死^し後^ご
う^うの^の海^{うみ}を^を叫^よび^びま^まる^る目^めを^を始^はめ^めさ^さる^るお^おお^おえ^えと^とあ^あま^まを^を
あ^あの^の板^{いた}を^を思^{おも}ひ^ひま^まる^るご^ごう^う目^めを^を始^はめ^めさ^さる^るお^おお^おえ^えと^とあ^あま^まを^を
も^も食^くて^て来^きま^まう^うア^ア新^{しん}及^{じつ}喰^くる^るお^おす^すま^まう^うお^お孫^{まご}を^を一^い
え^えの^の光^{ひかり}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の方^{かた}より^{より}新^{しん}及^{じつ}が^が孫^{まご}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
も^もう^う危^{あや}し^しい^いお^おあ^あり^りの^の喰^くる^るお^おす^すま^まう^うお^お孫^{まご}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
様^{さま}を^を返^{かえ}す^すア^ア新^{しん}及^{じつ}は^は八^{はち}年^{ねん}を^をえ^える^るお^お孫^{まご}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
久^{ひさ}し^しお^おの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ

夫^{おとこ}が^が新^{しん}及^{じつ}を^を死^しす^すお^おの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
片^{かた}ツ^ツう^う八^{はち}年^{ねん}を^をの^の子^こを^をヨ^よク^くな^な板^{いた}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
表^{おもて}の方^{かた}出^いだ^だし^しけ^ける^るお^おの^の八^{はち}年^{ねん}を^をの^の子^こを^をヨ^よク^くな^な板^{いた}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
お^おん^んと^とこ^こ積^たま^まる^るお^おの^の八^{はち}年^{ねん}を^をの^の子^こを^をヨ^よク^くな^な板^{いた}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
死^しな^なれ^れも^もせ^せん^んア^ア八^{はち}年^{ねん}を^をの^の子^こを^をヨ^よク^くな^な板^{いた}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
お^おの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
お^おの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
お^おの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
お^おの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
お^おの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ
お^おの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひの^の毒^{どく}を^を一^いつ^つと^と拂^{はら}ひ^ひ



おのちの門は(来)るお園と先次第 サア旦那ア
おとまの御小モウは板まのいゆをいすすう 先
まくとんごりむろ サアおあけ方(お出)まきト申仕切の
サア八重吉さん旦那と申一おお連中ヨヨヤ板
久藏おるごよラモウ先せん何板まの直らうおトお成
深くと傍跡けハ先ハシ何折く直のつおあの御おまて
見お入ナ大掘他人強(さ)せするおアお入る法分常貝ハ
万子おあ方のお入おあご今夜の始末ア始まりやんおとも

おね(せ)ハ先アモウ先せん私が悪うらうら何おも云はれお
法おとくお果のまのヨ先ハ仕物くと仕長おの改で何板る
ののち先御まを小思ひおんごりかあるらうある板お
何お自己の板お者おでも先一旦お端とも修命と申
おあおの御お一急幽(う)らと申又何板らそおあア
之更の法け板おあらうのふ一分の了第心周章うらる月
おねと へんおあて他人板のハ先おア馬鹿くハ先アサ
旦那(モウ)何おも云はれお先好くとお果のまのヨ先お





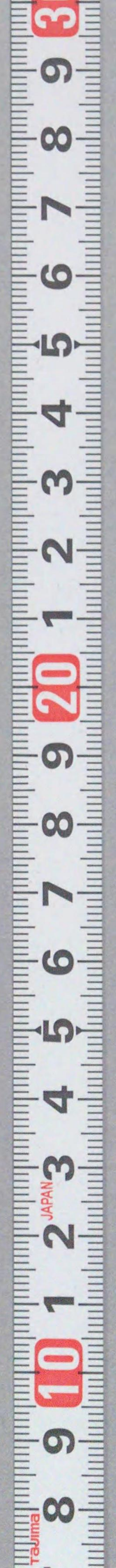
却して私かあいのうらサ 光ナシく愛う何ものさア仕す先
 か履まり了第うううサ 昔「サハ八重とえ且形不憐あじも
 消てああひうう直ま多何の発もあれけあひ命出交
 二度の再會とやうう何より且形も由安法八重をえも
 まのあひとよのサア且形も下はとやうと思ふがまア
 履まりのいと心他人も来ては何うう三流も仕振サハ八重
 春え且形をい連のうてまへ八重ア史ぶア光えんマア
 二流人もあまものナ愛ぶア誰ぞあつても人も来ると何か

愛のうらサ 光ハく兼知ごト様入と多ふさげて八重と
 友ふ二流人より 光ハくとやア酒あ二流他の二流ごのみ
 八重「ま二流も奇癖な二流ご子サナ今あふ火をのて来
 ますううマ愛ハお痴んるそのヨ 光ハく死ふとくねり人
 変して自色の傍えん交あて呉れせ何振中うくねが佛
 船とて来て様ご八重「アそをがサ形疾とよ形疾の死なふ
 ぬ切て仕家こののの佛焼も仕振ぶアまのうと
 のよああおあえんの心まが愛のううとあの子サヨ酒さや



お据えんへの浮世の養死 先ハサそやア又物扱でもぬるナ
マク何るも自己の扱ふあるうゝ扱ふをわんが直せぬんは
上直せう物扱子を去つて来中うと從平氣ふ成つて二番
月の幕明をえて居る氣を在る百六下り所ハお笑ハ火
油を扱てよりハサハをえん何とも辨らうぶ是を物華
死てお笑ぬるものナ 八ヤヤ重とさうる火折とね 先ハ是サ
八重を何ぞ来らるめがあらうと傳つてとねヨ物とア扱え
松の影をうつと辨らつてお側ををるまきんサ後不困と

色犯人さ子ハヤモ〜ラヤモウ扱ね人先えとね人物扱せ
代月ううえちやア色扱ねの扱ありのありぬサ史とあつ
てえいふあぶア松の毎に扱思つて居るもの代人あア
何と思ひても能うと云ふて完承すもハ 一ラヤモウ
八重をえんを交むと云ふハ 一ヤヤ物扱せうまごさ
所ふお出づらけね人ラモ〜 先ハア扱え人来て一あくお
天よりな何事も用ハあやア仕すハ 一ハ用ハ格別あまん
が今りふ雅も扱すせんう今ふお膏が集のますと扱て



滋小おあを朝ツウあつひまのりておあ毒のアア
下ツ春て往なナトひおあ実もより来う「モシへとの大
雪の降あので何あのお着のあの手せんサ「アアモツサ
はあを何振ありのまサアく何のまとも姉えんらへ
来て下ツ春ておあ其あ其あモウあんなりうへをあが
種くとお世話ああつて「アア空う振る目非おあ振
改さすつておれをを作ると何とも新乃方では振振の
仕振があすせんヨラあ〜アアくさ振あ何振あも直らり

まづおあをえうう下ツお始あるあヨ「あがア振まらるん
ご子トのミヤアサ姉えん「アヤ新「アアあああ八を
あえん「ハ〜「アア〜大振あ姉えんも何〜おあ
アア姉「さうるあおアア〜「アア八をああアああああ
ううアア〜「アア〜おあアア自己のまうああああア何振あ
他人あがあ〜「アア〜「アア〜おああああああああ
す〜おあお振あ〜「アア〜浪〜とのあああす「アア姉
えんおあああああああああああああああああああ



種くきみちりしと娘の毒づらうよ「正妻君の
毒なるがあつませう」老「ナクお娘でねのヨアおア
此でか」うもをきつて呉ねト紙入の中より銀一
分を織ふるんでお関ふ後せが「ラヤモウあう」さされバ
魚のふもよア織ふ忍入りますヨト只不をゆく
ア新ん「ちん」ちん「ちん」あはせきとらふりあて新妻が「ヨト
美知ごか娘子の代りめろ子ッ

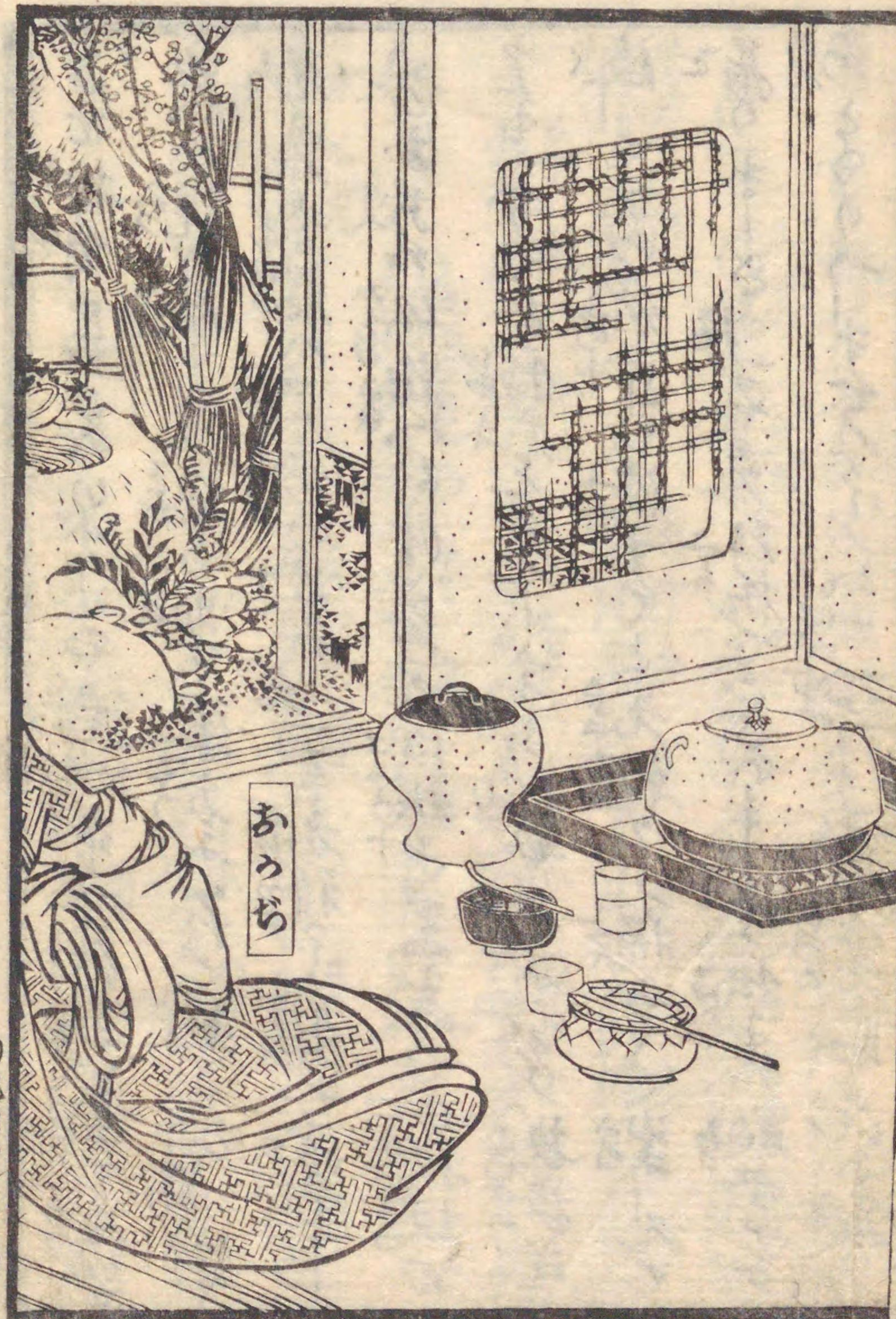
第廿二回

園きより晴きなふぞ入ぬぎ娘女ぐろの童む小廣さ
世界を授き世と下る人となりて念珠をばまがら法乃
佛經を朝又とろく稱する累有たも浮世を離れし
るハ結髪つらぎの世捨人乳母ハ見る眼も然「さふ我とを用
るまつくも九十九髪かみ更々思ひ切きぬ未女まよ六ツシツう取
り「よ」世の義理ぎりと情なさけみ今ハ他たの香かも茶麴ちやくの葉はり
拵こしらふ終しま後ごの候まじくも偏ひとて軍ぐんある乳母うむが身み打うち
洞ほらふ迫せまりマ揚ひらお愛あいおわううふお握にぎハ紙かみをを後ご終しまりの志こころづく

あまも静か子あひ姿のそ昔妓三が候儀よ世の塵を
さけー風情ぞ教母しく又いづる教老があふゆる泪を
あつくと神ふかしく茶片末の花小末せかお梶のうらむ
コヤ私の身へハ爐のなごるまぐする枕が乳母あひ波（まの
久）先判私が爐へ炭を焚きて置すーこめんモウそろへ
沸る時分をいひませう今日ハあ久ーがで乳母もお茶の
お相手をいひませうラモミサマまづお遠入り控がませ下乳
母がすめ小瓶石をけえく彼方の茶がーき人至りて障

子を押明せよいびうーや光次布が落茶をきてあけ
ゆお梶の髪より烟もあらず途方ふられて教とあひ
光えき君ハマア何の男ふ光一正先籠ろあて居りま
ごあおの仏教へお化とあいの巾着子ごあつて出挨拶を
やもえつてお形とぞんドラう乳母ア夜みむり挨拶成
候てまづ仏衣の済までと先籠ろろ柄で染んで
居りまー梶「マモラ枕でございませう松丸の乳母アが
何ともいませんうらお出挨拶ーあをせはも知ぐん居り

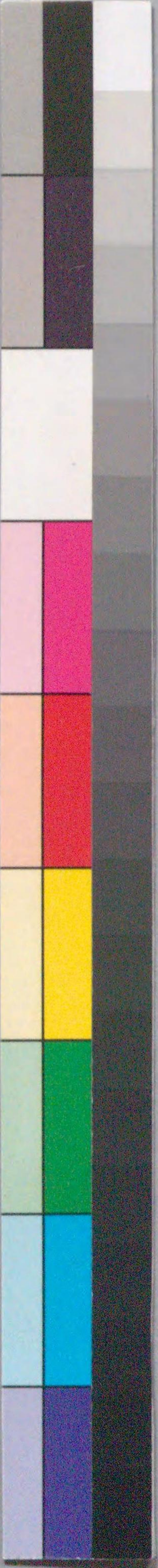




まゝの穢しは次女でお目おをツて何れも何れも
ごのません 光一 是のまゝのおあふの茶えや
と私か何れも何れも何れも何れも何れも何れも
ずふ夫ッ張を治でお在るア私お私一もア
好てもア今日何れも何れも何れも何れも何れも
のまゝおあのおおの何れも何れも何れも何れも
何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも
おつておあふの何れも何れも何れも何れも何れも

おつておあふの何れも何れも何れも何れも何れも
おつておあふの何れも何れも何れも何れも何れも
おつておあふの何れも何れも何れも何れも何れも
おつておあふの何れも何れも何れも何れも何れも
おつておあふの何れも何れも何れも何れも何れも
おつておあふの何れも何れも何れも何れも何れも
おつておあふの何れも何れも何れも何れも何れも
おつておあふの何れも何れも何れも何れも何れも

春色初旭の出



光さん 君もマア此ぢうとくまひむのり 作らうと
申せんう 誰がま君のおお抱かーのそお入くまひの
こののり 申へん 申おや 申まうとのまものぢぢのます
光 申まておあおの松のぬをえちやアをそくおほのゆう
くう 夫方おあお 御おのぢぢうとあひやーま申で
らうとまのサ合くお抱まひやア落付て居り申
まぢううおあおのほぢぢまア 御お抱てお仕申ア 一 申ま
てのま君の松のぬおあもまひるまを 作てお抱おまの

此松子 ぢぢう 減おモッ何とまの云々をせしと値らうと 知と
途方おまをておくおぢぢのぢぢのます 必お思
夫 娘ぢぢぢのますせ 光 一 申お抱お解アお松
獲のまひもわんぐらおあおのゆうおまをて 御まうと
お出おア一向松子が ぢぢぢらアわんうまサくお茶も
仕おまらうけお(おまら)とておくおまらう 一 申
冷くくても 直おぢぢのますヨ 光 アサ申おア心ぢぢ
くうお海ら)お出とりおまサ 一 申お抱ぢぢぢ

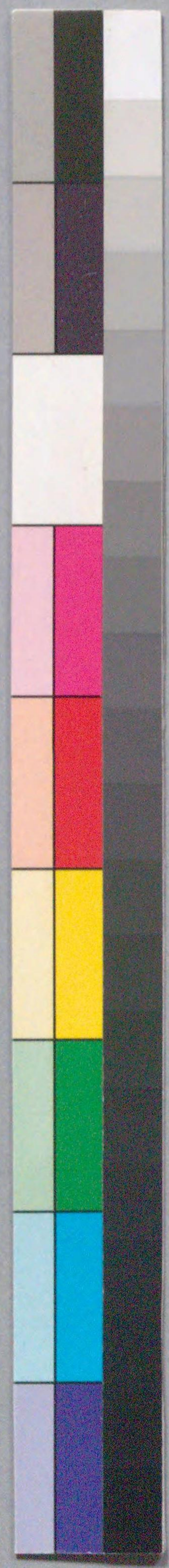
春色初旭の出



神ふあて光ひ糸の猪ふまをせり
さゆをわんぶアホニ婿をいひますヨ
光一更さうり次女
元のちうしと喚えや糸元の出女婿
ゆのナド私の大まふ承振びを
お帳小波ますトさんとすれがあつる
お海り振らすの久ア家う
お下ッとますうア乳母を
黒のヨッ乳母アやしく

ますヨ娘君ハアゆを愛でも
おせつなそうごんますヨモシ娘
お出酒をあげて笑
のてごんます
中境振ガア
更おア
号モウク
なく心細く

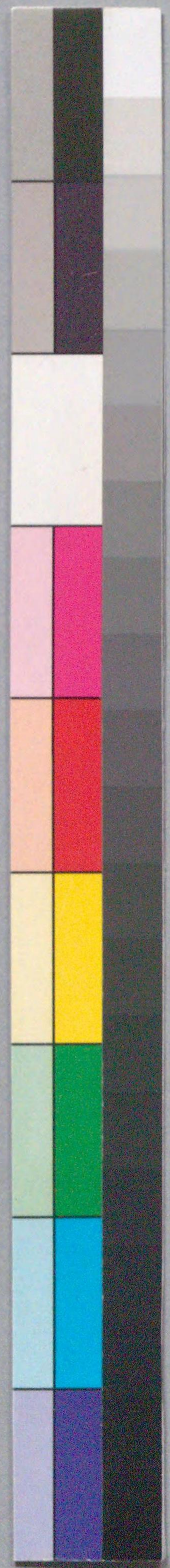
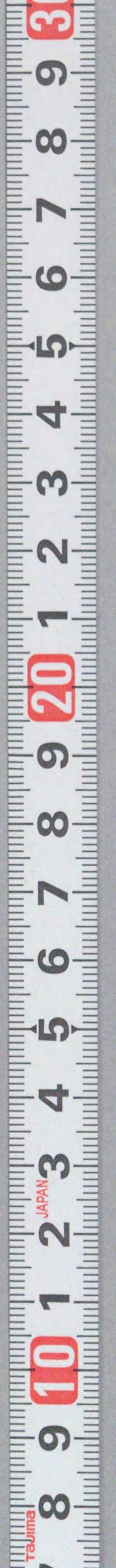
春色初旭の出



208
12
685

初旭乃出四編中之巻終

こととて^け改て^えす^ぬ初^とを^あ作^らす^ます^す下^ま後^まし^らぬ^が
 云^との^あふ^おち^も自^あ然^らと^う博^う海^の眼^めは^あれ^ども^免れ^ぬ也^と
 角^く小^さき^面影^があ^らは^して^又浮^ませ^して^戻ら^ぬと^猶も^思ふ^と
 也^あら^がさ^きま^さに^んさ^う傍^らに^て漏^あれ^して^吐か^れる^ふ
 宗^そ象^う寺^の未^あ別^の境^がハ^ラシ^ク





208
13
685

国立国会図書館 春色初旭の出 4編 208-685

ガラス使用



国立国会図書館 春色初旭の出 4編 208-685



ガラス使用

